五十一番　初秋

左持

魚すゝもしはしは錦をるの縁　　班象

右

奥山にさへ音ゆかしきの秋　　宗瑞

[illegible]

左は花鳥にもなれやかなれ中に

彼一葉みしあてり出る秋にけんもの

香りより金気西に蕭爽風清に錦そめ

葉は錦に調ひ力有りてとりかなへ

右は組ハほそく織出る錦の優にかなふ

小は秋のたつしきよう[illegible]

雲英文庫

五十二番　七夕

左　勝

星の夜やむつまじき風の居室　　竹阿

右

七夕やしられぬのまゝ須磨の名　　素丸

五十三番　涅槃

左　勝

幻さ行く入利の涅槃像　　蓼太

右

極楽を口ゆるめ宮じ涅槃像　　雅家

五十四番　躍

左　勝

水車秋をはなれて躍けり　宗瑞

右

此川へ秋[illegible]かゝる鮎　仙詞

五十五番　虫

左　勝

挑灯さげ行やむしの声　嘉九

右

虫籠を探りてしゆく頼うれ　夢考

五十六番　稲妻

左　勝

蛍に風さへ稲妻うつる野路哉　班象

右

いなつまのさそ山雲にかゝりけり　朱竹

五十七番　蜻蛉

左　持

おほつかな稲穂にとまる川蜻蛉間より　夢古

右

唐瀬か一本や蜻蛉のゝ流れゆく　宗瑞

左はおほつかなの五文字幽玄にして蜻蛉の立居
てぬる葉かへと似たし風情ふかしくむ事さ
出来ハむかより勝まくし新義蜻蛉の出る眼
能同をさかと花を得かけるか細く思わる
みさうけやさしくとりとも俳の場中
郎をたしむ篤し上手あり鉄力難事
しく行ずほしつく右を打ぬかしまもありう
始み組ゑ見かし勇両か持と成る也

五十八番　名月

右　勝

名月や聖風呂よりも人の情けか

素丸

左

新月や古き都の車道

卯菴

五十九番　駒迎

右　勝

岩角も月の光や駒迎

竹阿

左

旅人の走りぬけるや駒むかへ

英古

六十番　角力

左

はじめからかりや相撲の丸裸　宗瑞

右　勝

寄中に投つけられて[illegible]や角力かな　素丸

六十一番　花野

左

書て見に自由の花野野割れも[illegible]　雅彦

右　勝

追剥に秋を[illegible]かれる花野かな　蘭台

判者

左の句は[illegible]咲き夕日[illegible]
細き[illegible]も[illegible]
[illegible]や[illegible]
獨[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]や[illegible]
[illegible]勝はまさ

六十二番　鶏

左持　　竹阿

おくまで明りて月まや鳴かな

右　　素丸

隠れゐる夢や鶏声に帰る路

きゝつゝ鶏声に啼く鶏の朝
名もの字より七文字をさへなくおくる紀煙
深谷山の古語鶏鳴の徳めかし
てめでたくや　右は鶏の声鶏鳴へ
往来のきにも鳴くやらや鶏力も
へりとすれ鶏鳴左はさせん左右を
かけるに利ありかと申すに絶まさる
ことも出来ぬばかりなり

六十三番　蘭

左勝　　宗瑞

紫乃香や菓子の経てそよ揺て香より

右　　班象

菓子のやまと唐との郷までの通ふ香

六十四番　秋霧

左　持

蚕じゃ川瀬を行くや秋霧　夢吉

右

道の辺の遠さなし秋の霧　河瑞

左

霧ふかく見るも[illegible]
蓑の遠かるに[illegible]
うるはしく角に八色[illegible]
[illegible]

右

道もしの[illegible]渡し[illegible]
[illegible]月は[illegible]
霧[illegible]

六十五番　渡鳥

左　勝

暮ゆくも山の端の明けや渡り鳥　素丸

右

行く雁[illegible]渡り[illegible]　宗瑞

六十六番　菊

左　勝

年寄りや奥のゆかしき菊の　小雲原　湘象

右

山もとの川路の菊もまもり　菊好精　蕣夫

六十七番　鶉分

左　勝

二代目私も肩を何方鶉かな　宗満

右

月星に枕の下の鶉かな　川叡

六十八番　蜻蛉

左　持

蜻蛉やとり替したる水の上　蕪古

右

欄干に膏見えたる合歓　素石

左は清水の表流としめしま（ら）しく右は咲か田の鍬をも未世に寄の名残哉しのびし風流感にしし
角力立のなる両手に力強きく梅子利なる
足志りく見るにて白眼のし錦
四つ手に入るか所さをくらぶくとお
とみし物語さ左右共に勝手以
より候故ハ持と可なり

六十九番　案山子

左　勝

門ごとに秋の鷹毛も見えし如し　初□

右

室の家まさに見る案山子哉　宗□

七十番　鹿

左

鐘なりり何見え遠さや峯の庵　去所

右勝

小男鹿乃物かと聴る月　茶丸

右はこしらるや鐘の庵と云かゝりしるは
鹿との紅乃下さ何紙さりし朝の何るん
といへしするさ右は聞えと聴ゆる月鐘
更さ深ゆるうし意気のゑ夜中不
鳴るやなかるとさ無心所着り
其物りし角力八夜話しともさ
播子紙いかの月さ徳さ指え
此播よりかんくかへる
幽きまれ勝の事紙分し

七十一番　鴈

左勝

夜くうるかのつる雁なれの里一ツ　宗瑞

右

聞そら家さまへの棧行　夢吉

秀逸

家さまうらへ鴈の声と勝ふけれく
右の方の神像しきくて西へ行あまるそうし
夜まりのうその初鴈物の情紙定くなり
右句は月二ツ三ツ何する也見る栄も仍を

判詞くゝ

右も播子八新ふわたみ摸くゝゝのしに若く載
なし七方三方ならしとやつかしゝ

七十二番　秋寒

左　勝

勧まる人の通ひもなし秋寒み　素凡

右

憶ふ紙帳の埋れもまりまら　那蘇

七十三番　菊

左　勝

荒くらし霜もしらさるや菊ぬれし　幸吉

右

大根もとしより稿てめくやりまうの菊　行河

七十四番　新嘗麦

花　持

新麦や伊賀の名の民一袋　家隣

右

新麦やまつの宮武田小麦の奈　素丸

花伊賀山のあらまし荒男強力の
手に伝はる名の一からみの備へ
風流みなり

右信濃甲斐の隣民武勇の素振頭
山にも名のみつ紅色あり田畑の
骨強うかゝりとみえてし勝て
花はよきに勝とつくべく

七十五番　紅葉

花

古寺の扉ひらきてもみぢかな　竹所

右　勝

てらしくる西日の道しるや和紅葉　以雪

七十六番　時雨

左　持

[illegible]や[illegible]時雨[illegible]　夢[illegible]

右

大佛[illegible]　素[illegible]

[illegible]山の[illegible]上[illegible]時雨[illegible]

[illegible]山の[illegible]和[illegible]面白し[illegible]山

七十七番　落葉

左　持

狐火が燃やしてしまふ落葉かな　[illegible]

右

志賀越への[illegible]落葉かな　宗瑞

左狐火が燃やし[illegible]一入と[illegible]山人と[illegible]右志賀越の[illegible]兼宗朝臣[illegible]八道[illegible]山[illegible]持[illegible]

七十八番　芭蕉忌

右

芭蕉忌や百味にそへて茶一盃　素丸

左　勝

ともしびや落ちぬ手向く茶の羽織　米坊

世をさりし翁の今もしたはしく涙に
袖をぬらしぬ花や生涯の徳光発す
雅や八畳庵つくり貞八畳庵又多く
名跡をいく秋に届かの神一縁貞
縁さすりの俳諧に深く帝運命の縁
またく此を向せ給ひ一路に緒始と申なん
よりて宗匠家　翁の菊紙鉢盛りを
並べと刑もなりて此方と増ませ書

七十九番　麦藁

右　勝

麦藁や継々つりまりの笠一蘇波　雅象

左

もも南やや寺さへ麦藁の梅花　参吉

八十番　冬枯

左

ひら〳〵や吹くるはしき山の煙　竹阿

右　勝

鬘や角擲りてさて帯良が勝　富鶴

八十一番　小春

左　勝

田舎の鶴見えて眠る小春かな　寿几

右

雄子ら洗濯しける小春かな　雅家

八十一番　帰花

右　勝

鴬乃七世的孫や帰り花　　宗瑞

左

雨十切ち垣生乃末なるや帰りむ　　莫夭

八十二番　海苔

右　持

先知る世を何とて[illegible]海苔[illegible]　　理数

左

我鶴乃ねころ[illegible]海苔哉　　[illegible]

右

[illegible]

左

[illegible]

下

八十四番　冬籠

左　勝

硯にも古き絵の水や冬籠　夢太

右

剃刀も研く事さへ無冬籠　素凡

八十五番　鴛鴦

左　勝

鴛や浪としき寝る床の錦　竹阿

右

打よりや蓮乃跡に浮鴛鴦　宗濤

下

八十六番　鶏頭

左

夕焼の山ゝ暮て鶏頭哉　雅家

右　勝

燃しさし紅葉のごとく紀伊の鶏頭　夢吉

八十七番　枯野

左

蝶のとく背よりかくれて枯野哉　素丸

右　勝

力なく入日の西に枯野哉　丹阿

八十八番　衡

左

塩濱も麦をかりけり稲村崎　　宗瑞

右　勝

むらさきも風に波起して蕎ばたけ　　班象

秀逸

猛虎生風としきを咲しき
新の立さりて白波と
蕎麦しく飛さき
くれつるに又立かへし
陽中さしたりけり
採る哉

八十九番　水仙

左

水仙や折うけ垣よ濡縁抄　　升阿

右　勝

水仙や主人の庵を耕のむ　　蕪太

九十番　鶺鴒

左

稲妻の落し子とや鶺鴒　宗瑞

右　勝

常ならぬ住やみぎはね　素丸

九十一番　埋火

左

埋火や灰さへ結ぶ古友故　睡象

右　勝

うつみ火やなれ／＼し老ん　竹阿

秀逸

松宿りしと申鶺鴒となりや此句より

火の温り有りさしき歌なれもして

此句を讀む紫も古常乃國両をも人

の見るいつまもおちもるまくも感情

ありや如し

角力をとれば八角獅の御吉もなを

閣れし

九十二番　鷹

左　持

鶺鴒のおそるゝ勇む拳かな　英太

右

鷲鷹や木からしの月に従ふ　宗鶴

左鶺鴒は竹にいさむまろき團扇にも
やし　桓公なりし頃は管仲有と
学ぶ姿なる合力辨さもあるらし
右鷲鷹と並ぶとかく
此ゆかしの月に従ふるは
西國桓公のやもおよぶまさ

黄絹幼婦外孫齏臼　拝判

九十三番　初雪

左　勝

初雪や隅まではたの小笹原　素龍

右

くり鳴や十ゝ初月まちむかふ乾山　班象

九十四番　湖代

左　勝

わし鷲の巣よりはや胡良山　竹河

右

河竹世つも貫子一ふやわらか　宗瑞

九十五番　錦和

左　勝

まちわれ月秋八こつく鹿より　秀遠　夢太

右

鵜飼の火も遠く照らせ也　錦和　素龍

月秋さらつくし
可知所見手より
みつから[illegible]
見[illegible]老師の
[illegible]
[illegible]

皇都
[illegible]
[illegible]
[illegible]

九十六番　瓢

左

夜念仏の糸に切るる瓢かな　宗瑞

右　勝

ちろりんと枕にひゞく[illegible]　班象

九十七番　寒声

左　持

さむ声の末や鷺も川千鳥　素丘

右

寒声や嫁忍ぶる渡し月独　竹阿

左

川原にさまよひ立[illegible]

右

[illegible]遇不至體一轉一生の[illegible]

九十八番　衣配

左　勝

物いはぬ男拵ひや衣くはり　　雅象

右

衣配裁テも去年河の年の首　　募古

九十九番　餅搗

左　勝

撞木も罕とあつかる餅搗孔　　竹洞

右

鳥消る佐日の新や餅の音　　家瑞

撞木に佐日とらする奥羽乃
古事まさる猿志のみ
よりし餅のれハ所郡の人の
身をしらさやの東都の蟄
栄うかし絶の望まし
　　　　　　　[illegible]

百番 下

左勝 寳船

寐ごゝろや宝舟まつ一ト間かり　蓼太

右

居所〻を巨燵とし入て宝舟　素丸

きゝ風の新しみ一句とは云し八家語曰舟非水不行水入船則没と圖家身神を傷る俗

多說者は舟は浮める事あるをし

角力とし手に理の勝をとらむ由へ右意の負ならし

そう

右炬燵といふとは云しハ則家との方は皆

炬月けのしれもむかのう上五文字いかにも

中頃僅ハ左ぞ勝とは

夏のおかしく何日めしかし何角とへすに何

とりも是ましの返報

雪中庵俳書目録

書林西村文刻堂蔵

續五色墨 竹阿 宗瑞 素丸 班象 蓼太	續百番句合 馬光 史登 評
きのふの百員 鳥明撰	芭蕉庵再興集 蓼太編
新篗引集 山幸撰	新北窓 うちのゝ 桃祖撰
附合小鏡 牛家著	三春日記 蓼太述
去砂子歌 書成 鹿求 子交 著	画のこと 近刻 山幸撰
或附百員 近刻 吏中著	其角文集 近刻 蓼太撰
芭蕉翁附合集 蓼太撰	居川のほたるぶくろ 近刻
住吉千句 一冊 蓼太 吐月 夜兎	蓮花舎 三冊 蓼太撰

秋山家　夜兎撰

嵐雪翁句集　全二冊

吏登翁句集　全一冊

蓼太翁句集　増補　全二冊

志ら梅　曲川翁句　追善哥仙

小窓翁句集　雪中庵社中

雪中庵子規亭附合高点集　三銘撰　一冊

神の路　南凡　一冊

蓼乃實　莊丹　一冊

蓼太翁句集二稿　近刻

七柏

貞徳　次韻

宗因　虚栗

六通　蓼太

續虚栗

未来記

独吟

附録三十六歌仙并翁句